経気管支凍結肺生検で DIP 様所見を呈した，IgG4 陽性間質性肺炎の一例

高野慧一郎[a]，高橋　　守[a]，永山　大貴[a]，古川　絢登[a]，高橋裕樹[b]，千葉　弘文[a]

[a] 札幌医科大学医学部　呼吸器・アレルギー内科学講座
[b] 札幌医科大学医学部　免疫・リウマチ内科

要旨：症例は 73 歳の現喫煙の男性．労作時の息切れと咳嗽が出現し，胸部 CT で両肺下葉末梢領域優位に嚢胞とすりガラス影を認めた．経気管支凍結肺生検の病理組織像では DIP 様所見を呈したが，血清 IgG4 値の上昇があり，免疫染色にて IgG4 陽性の形質細胞浸潤を認めた．閉塞性静脈炎や花筵状線維化は認めなかった．DIP 様所見を呈し，IgG4 陽性細胞の浸潤を伴う間質性肺炎と診断した．禁煙治療で改善なく，プレドニゾロン（prednisolone：PSL）を開始し，陰影と臨床症状は改善した．

キーワード：経気管支凍結肺生検，IgG4 関連呼吸器疾患，剥離性間質性肺炎
transbronchial lung cryobiopsy（TBLC），IgG4-related respiratory disease（IgG4-RRD），desquamative interstitial pneumonia（DIP）

短縮タイトル：DIP 様所見を呈した IgG4 陽性間質性肺炎の 1 例